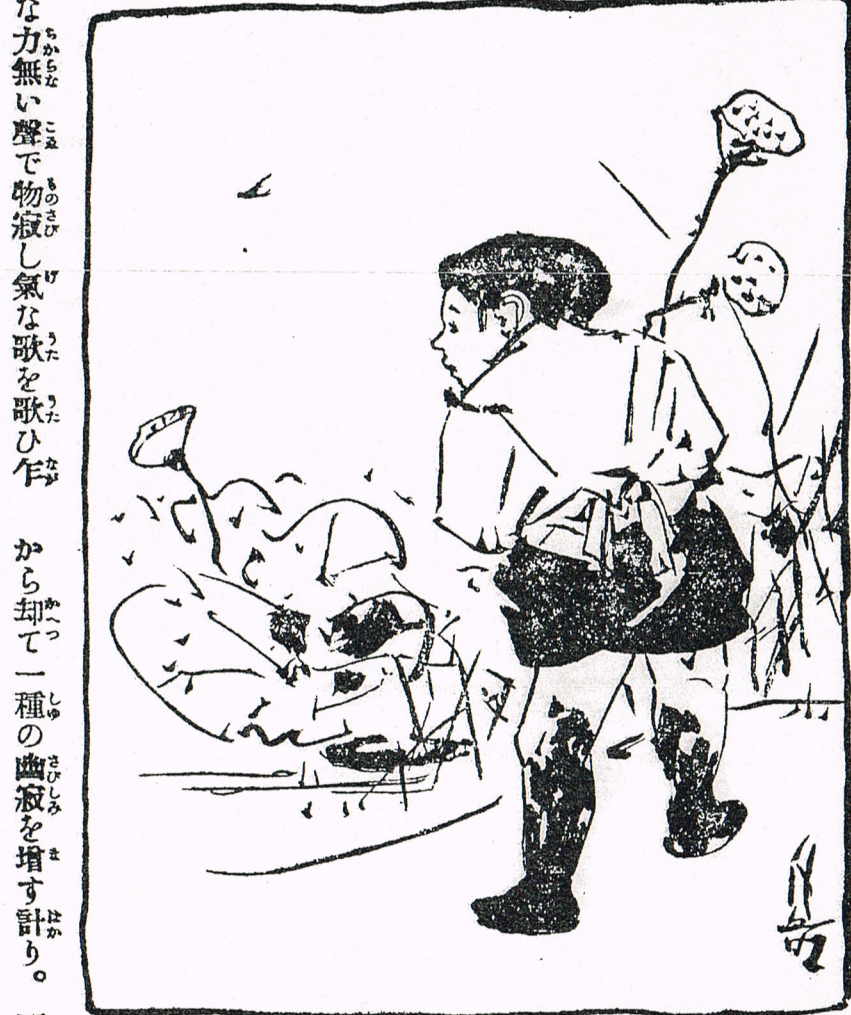


様で。二三日續けて降つた霜の爲に木の葉のあらかたは散失せて、僅に一縷の命を枝頭につないだ紅葉すら程も無い、根に復る哀れさを見せて、馬場一面の芝原は處々に灰を撒いたかのやう。本殿へ通ふ並木道との間を流れる小川には、微かな力無い聲で物寂し氣な歌を歌ひ乍



から却て一種の幽寂を増す計り。一步を此裡に入れば、つい此頃迄緊つて居た柊公孫樹名も知らぬ雑種の大木は骨露はに幹を延べて、血の氣の失せたやうな小枝には翼寒むさうに小鳥が鳴いて居る。日の光も何とは無う曇合とほの白く、遙かに朱い鳥居が見えるのすら、此様な景色の對照

# 森の黄昏

△第三等▽

美知代

夏ならば涼しい青葉蔭に時鳥來鳴く下賀茂の社頭も、秋を迎へてすつかり趣を變へた。殊に京都の氣

候と云つたら、昨日漸く冷風が立初めたかと思ふ間に、今朝は最早綿入れ羽織が欲しくなると云つた有

ら落葉の上下をぬけて行く其の並木道にも秋は宿つ

ると自ら神寂びた念が湧いて、やがて涙も溢れるのである。がそれは恐らく自分一人ではあるまい。自分は此頃日課のやうに夕餉を済ますが早いか、愛誦の藤村詩集を懐に毎日々々此邊を散歩するので、否之は此頃初たのでは無い、抑々自分が二年前都合あつて京都へ轉住つて以來、少々の雨風には頓着無く旅行と病氣と止むを得ない時を除けては、必ず此自然に接して苦しい煩悶も訴へれば儂い運命を泣きもして、且又妙なからぬ慰藉と力とを受けたので、實際下賀茂の森は自分に取つて唯一の隠れ家であり、はた又生命の安息所とも云はうか。父は死んだ、母も亡なつた、兄もなければ妹も無い、ほんに人として淋しい身ではあるが只此自然の懐計りは自分の爲に温い。——何時ものやうにこんな事を考へ乍ら歩くともなく歩いて、何時しか自分は長い並木道を通り抜け、朱い鳥居をくゞつて、宮殿へは寄らず音に名高い糺の森へと這入つて、上面の黄勝つた落葉をふ

んで、恍惚音を聞き、音が止めばまた歩み、參差亭心地好く簞り立つた公孫樹の木蔭を逍遙うた。歩み勞れ音にも飽いたので、遂に落葉をかき集め、静に其上に坐つた。勿論種々の空想を自由な憧憬の翼に載せて、而して其空想の翼が遂には双羽をひろげて此森一ぱいと成り、更に大きくなつて、果ては世界の上を駆け廻つて居るかのやう、我を忘れて幾時かを興に入つて居た。やがて輕う肩を叩くものゝ氣に心附くと、更に黄金葉一つ落ち散つて、憚つたやうな獻秋の聲が直ぐ背後から聞えたので、宛ら撥出されでもしたやうに、自分は一切の現實に復つたのである。只見ると彼方に悄然と坐つて居るものがある。後姿計りで顔は分らぬが、二十四五でもあらうか、瘦形のすらりとした體に栗梅勝つた縞お召の道行を着て、白茶色の肩掛をかけ、髪は品の好いエス巻六歳許りの女の子に寄添うて俯いた襟足の美しさ。『泣くの嫌よう』 長いまつげに露を宿して、少女は

凝然と見上げた儘傍眼もふらぬ。見れば今にも泣き出しさうな様子で、可愛い口元がびりりと痙攣れる……。

『よう母ちゃん』

『あら、泣きやしませんよ』と周章て云つて、強ひて涙を飲み込み、暫くして、『でも美佐ちゃんと逢つて餘り嬉れしかつたもんだから』

『左様よ、妾だつて泣いちやつてよ』

『オヤ、母ちゃんお嫌なの』

『好きよ大好きよ、だつても母ちゃんだつて泣いてるぢやないの』

『オホ、妾も美佐ちゃんが一等可愛い』

『うそよ、うそだわ』

『何故?』

『だつても皆が、母ちゃんはお前を可愛くないのだらうつて云ふわ』

『だけども、妾何うしても母ちゃんを嫌ひになれないのよ』と可憐し氣に傍にすり寄つて『ねえ母ちゃん、後生だから妾と一所にお家へ行きませうよう』

『否、今日は駄目なの……而してお祖母さんはお達者ですか』

『あらあんな事云つて、屹度又何處かへ去つちやうのよ』

『けどもね美佐ちゃん』と云つたが、耐らなくなつて、又染々泣くのであつた。

『母ちゃんだつて、それはお前を手放し度かないけども、左様云ふ譯に行かないの。お前はまた年が行かないから何もお知りでないが今に成人くなつたら全然お解りです、小供心に不人情な母だと恨んでもおるでだらう。けども、けども……否もう……母ちゃんの事なんか忘れて、一生懸命お祖母さんを大切に、父様の申付けを何でもハイ……ッて聞くんですよ』

「嫌よく父様嫌よ」  
 「何でせうねえ美佐ちゃんは」  
 と酷しく云つたが、衝と引寄せて抱き締た儘、さ  
 もさも可愛くて堪らぬと云つた様子に、幾度となく  
 頬摺りしては潸然と涙を流すので、美佐子もつい悲  
 しくなつて泣き出した。

「お前は眞實に可哀想だよ、兩親立派に揃つて有り  
 乍ら……堪忍して頂戴。でもお祖母さんがよく面倒  
 を見て被下つて云ふから……さあ〜餘り遅くなる  
 といけません、歸りませう」

「ちや母ちゃんは如何してもお家へ行かないの」

「あゝ左様ですよ。けどもお祖母ちゃんにも誰にも  
 母ちゃんに逢つたを云はなさや、もう一度ツさり  
 此處で明日逢へるかも知れない」

「何故云つちや悪いの、お祖母さんも屹度逢ひ度が  
 るわ」

「何と云ふ無邪氣だらう、あゝ一寸お前此方へお寄

りな、此御袖は何でせう、全然とれてるぢやないか  
 ね」と云ひ乍ら、荒い矢飛白の被風の綻びを結ん  
 で、「矢張何と云つても行届かないのねえ」  
 「あら、あら家の初やだよ、初やあ、お前何處へ行  
 くの」

ばた〜と人の驅け寄る足音に、母はあなやと驚  
 いて、つと闇の中に身をさけた。

「お嬢様、あなたはまあ何故お一人でこんな處に被  
 居いました。早くお歸りなさいませんとお祖母様は  
 大變に御立腹で御座いますよ」

「だつても妾……」

「そんな事を仰有ると初やお祖母様に云ツ告げて  
 御飯を差上げませんから、さあ早くお歸り遊ばせ」  
 「嫌だ〜」

けれ共下女は無理に引立て歸るので、自分は何か  
 の力に壓せられた心地に、胸が引締つて化石のやう  
 に固くなつた。

「美佐ちゃん堪忍してお呉れよ」  
 激しい戯歎の間から押出す聲の途切れ〜、繰返

其頬には玉なす涙がしど〜に流れて居る。  
 風が吹いて木の葉が舞ふと、名も知らぬ鳥の消魂



へす憐れ  
 さ。見る  
 見る 四邊  
 は急に闇  
 を成した  
 が、また  
 それが分  
 れて、や  
 がて二十  
 日餘りの  
 幽かな月  
 影は此年  
 古い森の  
 中の濕つた空気を破つて、觸れば霜になりさうな光  
 を投げ掛けた。女の顔は誠に死人のそれで、而して

しい聲が、つい傍の梢から起つた。  
 自分は其儘歸つたが、哀に感じた母子の係は却と

忘れられないで、今でも何かすると何故の離別たら  
 う等と、他事ならず胸を痛めるのである……。

【完】